
I(いかん)S(そいつには手を出すな)

まっちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS^{いかん}（そいつには手を出すな）

【Nコード】

N8723X

【作者名】

まっちゃん

【あらすじ】

これは、ACfAとISのクロスオーバーっていう分類にはいるのか？

【アーマード・コア（AC）】と呼ばれる、人型の兵器を駆る青年の話である。 作者はACfAとISの知識はかなり中途半端です。違う点があれば遠慮なく指摘してくださいあ
もちろん、亀更新です
三

chapter 1 - 1 プロローグてきななにかだと思っかな？（前書き）

新しく書き始めました。ネギま！のほうの更新がとまってますが、ストックが切れたのもうしばらく時間が掛かりそうです。

この小説は見切り発車です。相変わらず亀更新です。作者の独自解釈、独自設定が飛び出す可能性がたかいです。

そういうのが苦手な方はブラウザバックを推奨します。

chapter 1 - 1 プロローグ できななにかだと思っかな？

この地球上には幾つかの大陸がある。

地球最大の大陸、ユーラシア大陸に始まり、アフリカ大陸、北アメリカ・南アメリカ大陸、オーストラリア大陸に、南極大陸。そして、近年発見された【ヴォルシオーネ大陸】

この最後のヴォルシオーネ大陸はここ最近見つかった新しい大陸で人類の新たなフロンティアとなるはずだったが、現代までその大きな大地を隠してきた技術力は遥かに今までのものを大きく上回る。

その大陸の位置は太平洋のど真ん中にあつた！！

貿易をせずに発展してきたこの大陸では世界がインフィニット・ストラトス、通称「IS」に関心を示すよりも前に似たようなものがその大陸では普及していた。

それは【AC】と呼ばれる、人型の兵器だつた。^{アーマード・コア}

今現在のヴォルシオーネ大陸では次世代機「NEXT」が主流になっていた。

その大陸に存在する多数の企業、企業に支援されて始めて稼動する「NEXT」。

そんなヴォルシオーネ大陸を治めているのは一つの国

企業主義国家「ヴォルジヴァーナ」

これはその「NEXT」を駆る青年の話である。

chapter 1

プロローグてきななにかだと思う

目の前には見慣れた砂漠が広がっている。

砂漠には廃墟が多々ある、今いる場所はそんな廃墟のひとつ「旧ピースシティ」は俺が自分の機体「NEXT」の『サヴァン』のテストによく使う場所だ。

今日も相変わらず企業連から引つ切り無しに

「新しい装備ができたからテストしてみてください」なんて言われてテストをしている。

これがまた面倒なんだよ。この前なんか適当に了承してたら

「この前の装備の感想を（ry」なんて催促が酷いったらありやしない。

仕方ないから適当に返事してきた装備を使ってみて感想をメールで「簡潔」に送っている。ただ一言「ロマンが足りない」とか「見た目が悪い」とかetc...

どの企業も特化型の武装やら装備しか送ってこないんだよな

汎用型のやつは作らなくてもいいのかなとか思ったけど・・・放置で

そんなこんなで今もテスト中

今俺が使っている機体は確か、「四脚の中量機のデータが欲しい」とか言われて

スタビライザーがゴツゴツついた機体に乗ってるわけですよ。

しかも名前が、「四脚・グリント」って・・・どうなのそれ、安直過ぎない？

それにテスト中というかACに乗ってるときはその搭乗している機体名で呼ばれる。

つまりは『「四脚・グリント」、どうだ？機体に問題は無いか？』
・・・こうなる。
なんか、いや。まあ、次からは「かっこいい名前をつけて欲しい」
とでも
感想で送ってやろうかと思う今日この頃です」

『おい「四脚・グリント」！それは後にしろ！今はとりあえず武装
の試射を試してみる』
「了解」

えっと、武装は両腕に超遠距離スナイパーに背中にも超遠距離スナ
イパー？
は？意味が分からない

『目標は1.5キロ先に表示されるターゲットだ。全部弾を使うま
で終わらないからな。さっさと撃つてしまえ』

「・・・了解」
オペレーターさんも大概呆れてるな。仕方が無いといえそうなん
だけど・・・

実はこの機体は今ある機体の発展タイプとして送られてきたものら
しいんだが、あまりにも元の機体から離れすぎている上に明らかに
名前負けという。
・・・「グリント」は「閃光」って意味合いだぞ？
その機体を四脚にした上に完全に支援機としての武装しか積ませな
いって、どうということなの？バカなの？死ぬの？

とか思っているうちに全部撃ち終わっていたようだ。
『おい、あまりむちゃくちゃに扱うなよ。後々お前が使つのだから

な
』

毎日送られてくる装備の数々はテストした後は大概そのままテストしたものになっているのが現状だ、わかってはいるのだが聞き返さずには居られない

「えっ？これも？」

『ああ、それもだ。まだ山ほど（他の武装が）残ってはいるがな』

「はあ、あんなに気楽に受けた自分が憎いよ」

そう言っても送られてくる装備は減らないむしろ毎日増える……
ので、機体をハンガーに入れて「四脚・グリント」から降りる

とりあえずは、抹茶ラテでも飲もうかなと思いつきながら
食堂に向かって歩いていると急にアナウンスが鳴った

『風見 幽史。急いでオペレータールームに来い。』

「呼び出しかよ、抹茶ラテは……飲めないか」

そう一言残してオペレータールームに向かった

このアナウンスが青年の人生を大きく変えることになるとは
まったく思っていなかったのであった

chapter 1 - 2 白騎士事件に介入

『風見 幽史。急いでオペレータールームに来い。』

「呼び出しかよ、抹茶ラテは・・・飲めないか」

抹茶ラテが飲めないのを悔しく思いながらオペレーター室に向かう。その背中はどこか煤けていたと整備員が言っていたことを彼は知らない。

SIDE：幽史

空気圧の抜けるいい音と共にドアが開く。

大小様々なモニターやキーボードの上に雑に置かれたヘッドセットがまず目に入った。

「ん？幽史か。少し話がある」

そういつて椅子をくるりと回して体だけはこちらに向ける女性の髪は背中の中ほどまで伸びるパープルで先端が少しウェーブが掛かっている

彼女は俺の専属のオペレーターの霞スミカさんだ。彼女は辛辣な口調が多く、いやいや俺のオペレーターをやっているのかと最初は思ったがさまざまなミッションをこなすうちに俺に対する心遣いが見られることも多くなってきたので俺はいわゆる「ツンデレ」というやつかと納得している。

「現在お前にはミッションがきている」

「えっ？ ミッションならいつも通信だけで企業の仲買人が通達してくるやつでしょ？ 何でスミカさんがその代わりをしてるのか分からないんですが」

「ああ、それはなこのミッションが最重要機密だからってのもあるが一番大きいのは……」

そこでスミカさんは一旦言葉を切った。

「ORCA旅団としての共同ミッションだからだ」

ORCA旅団として？

「疑問に思っているようだから一応は説明しておく……」

そしてスミカさんの大雑把な説明を聞いた後、もう一度ミッシヨンの概要を聞いた。

ミッシヨンの概要を説明します。

島国「日本」が日本を射程距離に収めているミサイルが全機発射されました。今回のミッシヨンはそのミサイルを日本に一発も落とさないように迎撃してください。作戦領域にはVOBでミサイル郡の後ろから数を減らしつつ、首都、東京近海の上空にて反転攻撃を仕掛けることになっています。

このミッシヨンは衛星軌道掃射砲（エーレンベルク）を使いミサイルを全て落とすのが目的です。エーレンベルクは今回のミッシヨン用に小型化されています。このミッシヨンはあなたの好きにして構わないそうです。あなたが単機で先にミサイルをある程度落としておいてください。そのほうが後が楽でしょう。

またすでに所属不明機体が迎撃しているようです。不明機とコンタクトを取り、出来る様なら協力してミッシヨンを完了してください。

これは、ヴォルジヴァーナの存在を世界に知らしめる重要なミッシ

ヨンになります。企業連はあなたを高く評価しています。良い知らせを期待します。

との事らしい。エーレンベルクを小型化とか、何をするつもりなのか小一時間問いただしたいところだが、まあいい。今はこの作戦に集中しよう。とりあえずはハンガー（格納庫）に行かなければな。

『機体のチェックは済んだか？』

「ああ、後はVOBの接続を待つだけだ」

今現在は険しい崖に作られたカタパルトにて出撃の最終チェックをしている。今回のミッションはほとんどの確率で空中戦が予想される。機体にはかなりのEN効率とリンクスのENの節約が重要となるミッション中にEN切れで落ちました、とか洒落にならんからなよって、仕方がなくEN効率がいい「四脚シリーズ」を使うことにした。

『VOBの接続始める』

「了解」

機体からモニターを通じて様々な情報が映し出される。

——VOB接続開始——

——メインブースター異常なし——

——サブブースター、スラスター異常なし——

——腕武装、異常なし——

——背中武装、異常なし——

——肩武装、異常なし——

——システムオールグリーン——

「こちら四脚グリント。いつでも出れるぞ」

『了解。——では行って来い』

VOBを待機状態に移行させ、十分にエンジンが温まったところでカタパルトの枷を外す。

機体がカタパルトを飛び出し、体制を整えたところでVOBが爆発的な加速を始める

——VOB巡航モードに入ります——

さて、後は作戦領域付近に近づくまでは時間の余裕ができるさりとて緊張の糸を切るわけにはいかない。さて困ったものだと思い始めていたら急に機体から声が掛かった

『マスター、暇そうですね。話し相手くらいにはなりますよ?』

「!？」

『あれ?マスター私の存在を知らなかったんですか?』

「…ああ。初めて聞いたな」

『じゃあ、自己紹介です。リンクス支援型AIのミクですう』

「ああ、よろしく。」

『よろしくですう』

企業連め、また良く分からん機能を積みやがって……

だがまあ……嫌いじゃない。

『マスター、作戦領域に入るよ』

「了解」

前方の青い空には黒い点が見えてきた両腕の突撃ライフルを撃てるようにトリガーに指をかける

『作戦領域に突入、よし。後は好きにミサイルを落として行け。出来るだけ落としておけ、後が楽になるぞ』

その言葉のあとすぐにミサイルが射程距離に入った。トリガーを引く、ミサイルが爆発。

『マスター、エーレンベルクのチャージをしないと反転した時に撃てないですよ？』

「エーレンベルクのチャージを開始」

『エーレンベルクのチャージを開始するよ、2分くらいかかるかな』

「了解」

背中に積んである小型エーレンベルクの平べったい砲身から淡い水色の色を放ちつつチャージを開始する。

というか何気なくチャージ開始したけど、不明機とコンタクトとってないな…でもまあ、今からしないと使えないし。終わった後にしようか、そうするか。

『マスター、そろそろミサイル郡を越えるよ』

む？、思ったよりも長く考えていたようだ。見ると目の前にはかなり数を減らされたミサイル郡がある、考え事をしていてもある程度は撃ち落としていたか…

そう思っている間にミサイル郡を完全に追い越した。そこには機体と同じ以上の大きさの刀を持った白い騎士がいた。

『VOB使用限界近いぞ——VOB使用限界！VOBパージ！』

バシユッ！

VOBが外れて速度が一気に落ちるがまだ完全に落ちきる前にQ.Tクイックターンをして勢いを遠心力に変換して体勢を整え、白い騎士のような機体の隣に機体を寄せる。

「誰だ！」

まあ、いきなり現れたら警戒くらいはするよな……

「こちらリンクス。味方だ。警戒するな……」といっても無理があるか。まあいい。これから広範囲殲滅攻撃を行う。巻き込まれたくなかったら後ろに下がっている」

SIDE：千冬

私は親友の束に頼まれてこの束が作った【IS】、白騎士に乗って日本に向かってきているミサイルを落としている。

私がある程度ミサイルを落としていると白騎士のレーダーが奇妙なものをつらえた。それはミサイル郡を追うように高速で飛びながら

接近してくる白い四脚の変態な構成の機体だった。その機体は肩が淡い水色に光っている。否、背中の武器が肩上部を通って前面に銃口を向けているそれは5mもある大きな薄い板のようなものだったがなんで光っているだけなんだ？しかも銃口から銃身にかけての銃のかなりの部分がただ淡い水色に光っているようにしか見えない手に持ったマシンガンで手当たり次第にミサイルを撃ち落しながらこちらに飛んでくる。

「束！あの機体は何だ！？」

「わかんないよぉ〜でも私は作ってないよ？」

束と通信していると件の機体があったよりも近くによってきている。

「誰だ！」

そう言うとその機体はどこか疲れたような雰囲気醸し出しながら通信してきた

「こちらリンクス。味方だ。警戒するな……といっても無理があるか。まあいい。これから広範囲殲滅攻撃を行う。巻き込まれたくなかったら後ろに下がっている」

『ちーちゃん、危なそうだから下がってようよ』

「……………了解」

どうやら知らず知らずのうちに気が高ぶっていたようだ。この白騎士には銃器は積んでいないので束と四脚の言う通りに下がっているのがいいのだが、

———こんな変態な機体で壊せるのか？———

と疑問に思ってしまう。が、それも肩の淡い水色に光る薄い板のようなものから放たれるエネルギーで

全てのミサイルが落ちていく光景を見て疑問は吹き飛んでしまった。

「ミッション完了。おい、ミサイルは全部落した。そちらはどうするんだ？」

今はミサイルが全部落とされ青々しい空が広がっている。それも、3分のことですぐに戦闘機や戦闘ヘリ、海には軍艦等が大量に出てきた。

「どうやら各国は今しがたミサイルを全部落した俺達を捕まえようとしているみたいだが、逃げれるのか？」

『こっちには、ステルス機能がついているから関係ないね』

「それはよかった。なら早く行け、俺はやる事が残っている」

その言葉を聴いてから私はステルスモードを起動した

『ちーちゃん、気になるのは分かるけど後にしよう』

『分かった、これから帰る』

そして私は誰にも見つからずに無事に帰ることが出来た

S I D E O U T ……

S I D E : 幽 史

よし、帰ったな。それでは追加ミッションを始めよう、今回は目標が二つあった。

一つ目は不明機——さっきの白い騎士のような機体——
——と可能ならミサイルを撃墜すること。これは今終わった。そして
二つ目、むしろこれが本題と言っても過言ではない。

――ヴォルシオーネ大陸の存在を全世界に知らしめること――

であるこれは、ミサイルを落した俺達を各国は必ず自国のものにしようとして動いてくるのは明白だから『追いつかれない程度に距離をとってヴォルシオーネ大陸近海まで誘き寄せる』。これをするだけで俺の役割は終わりだ。

あとは大陸に掛かっていたECMを解除してもらえば軍艦なりなんなりの

レーダーで大陸が発見されるだろう。

そうすれば各国の馬鹿共は新しく発見した大陸に自国の領土を持つと入ってくるだろう

まあ、そこは消してそこは新たなフロンティアではなく圧倒的な技術力を誇る

変態共の巣窟だと絶望することになるだろうがな

chapter 1 - 3

過剰防衛（前書き）

遅くなりました

SIDE：幽史

あの後、やはり外の国々はこのヴォルシオーネ大陸の存在に気がついたようだ今まで追いかけてきた軍勢はそのまま侵略でもするつもりなのだろうか。

だが、ヴォルジヴァーナも黙って自国の領土を侵されることを許すはずがなく企業連のお偉いさんたちのお茶会で撃退することを容認した。撃退にはリンクスとAFアームズフォートを何種類か出すことに決定した

アームズフォート

AF

それは企業の連中が経済戦争をしていた頃の話までさかのぼる。企業は始めACアーマードコアに当時の全技術力を注ぎ最強の人型兵器を作った。だが、その機体達はある一部の人間しか扱うことが出来なかった。その機体を扱う人のことを【リンクス】と呼んだ。【リンクス】は企業の最重要戦力として位置づけられていた。企業は【リンクス】が自分達の言うことを聞く飼い犬だと思っていたが【リンクス】としてはたまったもんじゃなかった。最初は企業の手先として戦い中で喜びやストレスを発散していたが、一部の過激派は手先であることに不満を感じ暴走した。暴走した【リンクス】により企業は壊滅的

なダメージを受けた。

それ以来、企業は貴重な戦力を一個人に委ねる事を良しとせず代替可能な多くの人員で運用できる戦力を目指した。それが機種によっては全長7kmに迫る超大型機動要塞AFである。

凄腕の【リンクス】たちは圧倒的な戦力差に物怖じすることなく、AFに単身で勝つことが出来るものまで現れた。

【ジャイアント・キリング】は奇跡の親戚に過ぎないものであった。

現在侵略する気満々な軍勢は俺の眼下にいるAF郡が見えてないのだろうか見えてないだろうね、レーダーには俺の機体しか映ってないと思うし。まあ、それも仕方がないさ、このヴォルシオーネ大陸の周囲50キロメートルには超強力なジャミングと対ネクスト用のECMが展開されている

迎撃に使われるAFは【ギガベース】【ステイグロ】【イクリップス】の3種類で数は5:3:10の割合で参加している。

【ギガベース】は箱型の双胴船体を持つ拠点型のAFでキャタピラによる地上走行能力と海上航行能力を有し、主砲は射程距離と命中精度に優れているが基本的に装甲が薄めであることが弱点であると

いえよう。今作戦では大火力の主砲で航空部隊を墜してもらおう

【ステイグロ】は水上戦用AFで射撃兵装はミサイルのみだが大推力のブースターと大型レーザーブレードによる突進は軍艦を一撃で沈めるだけの破壊力を併せ持つ。

また、大型レーザーブレードを射出することも出来る。

今作戦では海上を動き回って敵を攪乱しつつ軍艦を撃破してもらう予定だ

【イクリプス】は円盤に翼が生えたような形状の飛行型AFで大出力のハイレーザーキャノンとミサイルを装備する。ハイレーザーキャノンは機体下部に設置されており、360度旋回することであるゆる角度へ攻撃することが可能である。

円盤の真上に対する攻撃手段を持っていないため上空から【ギガベース】と同じく航空部隊を狙ってもらう

『マスター、幾らなんでもこれは敵が可哀相ではありませんか？』

ま、まあいくら凄腕のリンクスでもこの戦力差をひっくり返すには無理があるう、撤退を推奨すべきな状況だな。明らかなオーバークルといったところか、哀れな。

「そう言っつな、これもミッションだ。確かに企業連は張り切つているとしか言えん戦力だが……………」

まあ、すでに銭は投げられた、いまさら止めれまい

諸君は、このヴォルジヴァーナが世界の表舞台に出るための生贄となってもらおうか

運がなかったと思って諦めてくれ

結果的には白騎士事件の勢いそのまま追いかけてきた軍勢は明らかにも過剰戦力としか言えない様なAF郡と謎の白い四脚の機体によって壊滅状態になった

これを気に今までその存在を隠してきた新大陸「ヴォルシオーネ大陸」を国土とする企業主義国「ヴォルジヴァーナ」の存在とISの製作者である篠ノ之 束の「ISにはISでしか勝てない」を信じ

るほかなかった。

国連は白騎士事件の3日後に新大陸【ヴォルシオーネ大陸】と
企業主義国家【ヴォルジヴァーナ】の存在を世界放送で流し、世界
中の人々が認知した

chapter 1 - 3 過剰防衛（後書き）

主人公の口調が安定しないなあ

困ったもんだ

chapter 1 - 4 変態による魔改造の結果（前書き）

初めて感想をいただきました。

嬉しかったです

これからも（更新遅いですが）頑張っていきますのでよろしく願います。

あの白騎士事件のあとに行われた全世界対ヴァルジヴァーナの大戦はヴァルジヴァーナの圧倒的勝利で幕を下ろした。

その1週間後にISの製作者と白騎士の搭乗者と会う機会があった。その時に製作者と企業の変態達は意気投合し、ISの技術をほぼ全て教えてもらうことになった。

そして、その1ヶ月後にはヴァルジヴァーナを恐れた国連がヴァルジヴァーナと提携して新しい機体の製作を持ちかけてきた。これには国連の「今のうちに提携を組んでおいて、技術を盗もうぜ」という意図があった。…が、ヴァルジヴァーナはそれがあることも承知で二つ返事で了承。

国連と提携を組んで作る機体は国連側は一切手伝わないそうだ。それと変態達が気が乗らないとか言って作業を後回しにしているのもあって何も出来てない。

そしてヴァルジヴァーナの変態達が2ヶ月も頑張ったおかげでISの技術をACに組み込んだ機体が完成した。

これはACに申し訳程度にISの技術が使われた機体だった（割合

がAC：IS＝8：2）

使われている技術と言えば、【拡張領域】【浮遊型ユニット】【シールドエネルギー】【絶対防御】の四つだけであり、その他はまったくACと同じであった。

四つの技術を組み込むだけなので今ある機体に組み込むことにした。

それはもちろん、ヴァルジヴァーナのパイロット、【風見 幽史】である。

そして変態達は調子に乗り、今度はISをメインにACの技術を組み込んだ機体を作った。

この機体は1号機とは正反対な（割合がAC：IS＝2：8）機体になってしまった。

しかも、ISをメインに作ったのにも関わらず拡張領域という初期装備以外の後付け装備を機体に載せる物が限りなくゼロに近いのである。

しかも初期装備が近接特化型の変態機である。

企業は1、2号機のパイロットを決めるために会議を開いた。

1号機は全員一致で【風見 幽史】に託す（押し付ける）ことにしたが

2号機は、搭乗できる者がいなかったので見つかるまでお蔵入りになった。

パイロットの問題はあつという間に解決したので、議題は1号機つ

まり

【風見 幽史】の【サヴァン】にISの技術を組み込むついでにいろいろ積んでみようぜ。という傍迷惑なものになった。

この議題は2週間にもおよんだ。

そこで企業連は変態達に「いい加減まともな機体を作れ」と今更な通知を出した。

変態達は、仕方がなく国連との提携機を作ることにした。
しかし、乗り気ではないのでその作業は遅々としたものだった。

SIDE：幽史

というわけで俺はしばらく企業連に愛機を預けておいたのだが、なんか魔改造されて帰ってきた。

しかも突然持ってきて「今から起動テストして！」とか頼んでも無いのに嬉しそうに機体の説明を始めるし、なんかあんたらのテンションにいける気がしないんだけどさ。

もう何かISの技術が積まれてて、拡張領域って言うの？アレがなんかあるから今まで押し付けられた装備類が全部入るとか、いつも張ってるPAと追加でもう一枚にシールドが張れるようになったとか、

何かシールドENっていう新しいENを消費する代わりに、搭乗者がダメージを受けない機構とか機体をいつも身に付けられる様に待機状態（現在は時計、ちなみに左手首に付けてる）とかいう機体をコンパクトにする機能を追加してみたとか機体色を勝手に紅に変更したからとかどうなってるの？

これ、俺が乗るの？というかミクが心配なんだけど…。

アイツまで魔改造されてたら俺リンクスやめるからね。

ちなみに、あの白騎士事件の時の機体は「四脚シリーズ」の中でも『今ある機体を四脚にして再構成してみようぜプロジェクト』の一号機だからあれの機体構成は別にあつてもう今後乗ることも、見ることも無いだろう……。いや、そうであつて欲しい…。

と、とりあえず起動してみようか

えっと…？ 念じれば起動するのかなにそのSFチックな起動方法……四脚の紅いの機体をイメージ……

一瞬俺を光が包んだと思ったら、紅い装甲が俺の体にくっ付いている…この俺の周りを浮遊してるゴツい盾っぱいのは、えっ？ ……ソルディオス砲を埋め込んだ実体シールド？

分離飛行も出来る？ もう他には無いよね？ 後は前送った装備と同じ？ 今まで送った機体構成が全部入ってる？ しかも展開はイメージしただけ出る？ さっき聞いたよ、聞き逃してたけど…。

というか、またイメージかよ…。

ISの技術ってイメージすること好きだなあ。

まあ、装備がゴテゴテになつて動けないとか、見た目が麗しくないとか

よりはマシか……。この基準が真つ先に出てくる時点で俺も……いや、いや。まだ大丈夫な範囲だ！

取り合えずミクの安否を確認しておこうかな…。

ミク？居たら出ておいで？

『マスター！お久しぶりです！』

「ああ、久しぶり。何も変なことされてないよね？」

『？特に何も無いけど、マスターに会えなくて寂しかったです。』

「そ、そうか。なら良かった。」

なんか前より性格が人間に近づいてない？
まあそのほうがいいけどね

とりあえず今は、この機体に慣れる事から始めようかな。

あの後魔改造された俺の新しい機体に慣れるために、様々な機動を試したり、今までの戦闘と同じことが出来るかのテストをしていた。

そのテストの一環で戦闘AIと模擬戦をしていた。戦闘AIの名は【ラインの乙女】。これは企業が自社の変態達に——機体のテスト専用で作られたもので対峙した敵機の機動時における微弱な電磁波を感じて行動に移すという半ば反則染みた戦闘AIを作れ。

——という意味分からん指示を

電子系が得意な企業の変態達は5日という世の中の技術者達が泣きたくなる様な短時間で作り上げたものであり、変態によって作られた初めての戦闘AIなのである。

ちなみに、こいつにはまだ一回も勝ったことが無い。

いつかは勝てると踏んで出来るだけこいつに挑んではいるが未だに負けた戦闘データと武装の稼働データが大量に手に入るとい結果しか得られていない。それが悪いことだとは思わないし、無駄だとは思わない……が一回でもいいから変態の作ったものには勝ちたいと思うんだが、

うまくいかないものだな。

そんな感じで機体に慣れるためにいつも通り【ラインの乙女】と戦っていたある日の出来事である。

俺はまた何時ぞやの如くオペレータールームに呼び出された、
また抹茶ラテを飲めなかった……………

オペレータールームに到着すると見覚えの無い人物が3人いた。
青い青年と黒い青年と白い美女である。……………それいつものツン
デレ鬼もいる。

青い青年は、——キョロキョロと部屋を見回して落ち着かない
様子だ。——瞳も髪も青色だった。瞳は透き通るような青色で
髪も青色でツンツンに立たせていた。服もカジュアルな服装である
がやはり青色である。

黒いやつは、——腕を組んで壁にもたれている。一度ドアの音
に気づいてこちらを見たがすぐに目を閉じた。——もう何もか
もが黒色だった。瞳も髪も服装も全てが黒で統一されていた。…彼
の醸し出す雰囲気の数々の修羅場を経験しているとすぐ分かった。
リンクスだろうか…？新しいパイロットか？

白い美女は、——チラチラと黒い青年を見ている。——瞳は金色で髪は白色だった。服装は他の二人とは違って瞳や髪の色を合わせずにふつくしい服装をしている。

で？この人たちは誰だ？

「ああ、幽史来たか。こいつらはコロニー・アナトリアの傭兵とそのオペレーターとおまけだ」

「おまけじゃないぞ、東風谷 速希っていう名前があるんだぞ！」

青い青年がツンデレ鬼に詰め寄るが相手にされてないな。すると、白い美女が名乗った。

「フィオナ・イエルネフェルトです。彼はレイヴンです。」

レイヴンと呼ばれた黒いやつはもう一度目を開いてこちらを見た。ただそれだけだった。まあ、そういうやつもいるだろうとあまり気にしなかった。

「良かった、あなたが機嫌を悪くしないか心配だったんです。彼は出会った時から無愛想で……」

そう言ってレイヴンを責める様な目で見る。すると、レイヴンはど

こか申し訳なさそうな雰囲気醸し出し始めた。……………意思疎通が出来ないわけでは無いらしいから問題はないか…？

「で、そのアナトリアの傭兵とそのオペレーターはどうしてここに？」

「ええ、それはこの子のことです」

そう言って速希を見る。

「この子は私達がアナトリアを去るときに無理して着いてきたんです。私達はこれからラインアークの【ホワイト・グリント】の候補として各地を転々としなければならぬんです……………」

こいつ（速希）をここに置いて行くつもりか……………

「なるほど、それでこいつが居てはミッションの妨げになると感じたか。ちょうど今企業が作った機体が一機空きがあるんだが、そいつに乗るか？速希とやら。」

「俺は、レイヴンに憧れて着いてきたんだ。少しでも近づけるのなら乗ってやるぜ！」

「その心意気やよし。お前の乗る機体はかなりピーキーな機体だ。うまく使いこなせよ？」

「ああ！任せとけ！」

こうしてアナトリアの傭兵は新しい機体【ホワイト・グリント】に乗り、アナトリアの傭兵に憧れた青年は企業の変態達が作った機体【ブルー・ウィンド】に乗ることになった。この速希の乗る機体はこの大陸では珍しいISであった。

そして、速希が自分の機体に慣れてきてミッションをある程度こなして、アームスフットAFを一人で破壊できるようになった頃

いきなり企業連が幽史と速希に対してある依頼を出してきた。それは

日本にある、IS学園に入学してこいとのことだった。

企業連は

『このところ特に戦争も無く、平和な時代が続いている。

平和はいいことだが、どうも技術力が伸び悩む。技術力を伸ばすためだけに

戦争をしても差が開きすぎてほとんど伸びないだろう。

そこで、ISという新しいものから何かヒントを得ようと考えたわけだ。

それに君達は学校に行っていないだろう？一度行ってみればいい。

出来れば、ISの情報も取ってきてほしいがね。』

と言ってどうしても行つて欲しいみたいだし、断つたとしても強制的に通わせるつもりみたいだったけど…。

その話をハンガーで愚痴ったのが間違だったか………変態達が賤別代りとかそういう名目でいろいろ変態な装備を送りつけてきた。しかも、全部拡張領域に入れてある。とか何なのその新しいイジメは……

そんなわけで俺と速希は急遽。IS学園に入学することになったのであった。

「女だらけの学園に男が2人…いや、3人か…」

『マスター、私が付いてます。』

「学校かあゝ、どんな所なんだろうなあ？」

「どうせろくな場所ではないさ……。」「

chapter 1 - 5

IS学園に入学のお知らせ（後書き）

感想もらいました。

感謝感激ですv

これからも更新遅めですが頑張って書いていきますんでよろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8723x/>

I(いかん)S(そいつには手を出すな)

2011年12月16日22時55分発行